

西洋耽溺交流(下)

（饗宴編）

— 体験版 —

※あらずし※

鬼灯はE U地獄に訪問したが、ベルゼブブの命令で性欲の悪魔アデスに彼を屈服させることを命令された。

数々の媚薬責めに、医術悪魔プエルの意識改造、淫魔たちとの性交を得て、脱出した先では警備兵に淫らな拷問をされ、救出されては快樂まみれの全身洗浄を施される。

身体中に媚薬が浸透してすぐ興奮する身体にされ、鬼灯の受難はまだまだ続く・・・



※中略※

鬼灯が意識を失う前、彼は全身に強力な媚薬をこれでもかと浴びさせられた。その効果は触られれば欲情してしまう、という次元ではない。何もされていないのに、鬼灯でなければ泣き叫んで性交を望んだであろう激しい欲情が身体の内からしみ出してくる。

流石の鬼灯であろうとも、吐く息が熱く、身体の奥が滾ってしまう。

そして、下半身の違和感にも鬼灯は無視できなくなっている。

「んんっ・・・くっ・・・な、何を・・・挿れているんですか・・・」

左右に大きく開かれたその奥、鬼灯の秘孔に、弾力がある張り型が挿入されている。

目覚めてすぐに違和感を感じてできるだけ意識しないように無視していたが、今は、性感帯にずっと挿入されている感覚に我慢できず、快感を抑えられずに震える声で言い放つ。

「ああ、これですか？まー、『蓋』ですよ、蓋。これをとっちゃうと、ホオズキさん大変なことになっちゃいますからね」

意味あり気にわざとらしく口元を覆って笑い、アデスは傍らからブエルに差し出された透明のガラス筒を手にとって鬼灯に見せた。

ガラス筒の中は透明の溶液が満たされていて、ピンク色の椎茸のような肉片が、溶液の動きにつれて舞っている。

「ふふん、これ、一体なんだかわかりますー？」

「気色の悪い・・・そんなものの正体なんて知りたくもありません」

にべもなくそっぽを向く鬼灯だったが、身体は欲情の悲鳴を上げている。鬼灯自身の先端からはすでに先走りがトロトロと零れ、それに気づかれないか内心穏やかでないほどだった。

「この肉片・・・実は、鬼灯さんのアソコの先っちょの複製なんですよねー」

「はあ？意味がわかりません・・・」

そう言って切り返したが、鬼灯の脳裏に一瞬最悪な想像が広がり、そんなことはありえないとすぐに不安を打ち消した。

「身体で一番敏感な部分ですよー。これを身体のどこにでも移植すると、それだけ敏感になっちゃうって寸法です」

アデスの説明を聞き、鬼灯の想像がますます真実味を帯び、心が怯みそうになってきた。

「だから・・・なんです？」

あくまで強気を控かない鬼灯に、アデスはとうとう声を荒げた。

「全く飲み込みの悪い子ちゃんですね！これを身体に引っ付けられたら、コックの先っちょぐらい感じちゃうってことですよー！」

その肉片が、ガラス筒の中で何枚も舞っている。

鬼灯にそんな説明をするということは、これからその恐るべき悪魔の手術をこれからするのか、それとも、もう・・・

「ですから、それが何か。もう私の身体のどこかにつけてあるんですか？」

自身の先端に感じる快感は、叫びだしたいほどに強烈で、触れられれば悶絶せずにはいられない。特に鬼灯はそこが最も敏感で、涼しい顔をしているものの、触れられれば内心暴れ狂わなければ堪えられないほどその快感は強烈で絶対的だった。

身体が発情の熱に巻き込まれているものの、そこまで感じる部分は未だ身体の表層のどこにもない。そして考えられる可能性の部分に、鬼灯は絶望でめまいを一瞬おこした。

「ま、まさか・・・」

若干震える声で尋ねる鬼灯に溜飲が下ったのか、アデスは満足そうに背を伸ばし、ガラス筒を掲げて言う。

「そうです、そうなんです！これ、鬼灯さんのお尻の中に二十個！移植しちゃいました♪」

まさに悪魔の所業と言った施術に、鬼灯は怒りの前に洞内に我慢できない熱を感じ始めた。

張り型を加えさせられている秘孔の中に、自身の先端が移植されているなど、誰が想像できるだろう。意識すると、張り型に圧迫されているだけでズクズクと快感の疼きを感じ、口から熱い吐息がもれてしまう。

「そんなバカな・・・冗談もいい加減にしてください」

あくまでそっけない鬼灯の態度に、アデスは鬼灯が銜え込んでいる張り型へ手を伸ばすと、指で張り型の露出している部分を弾いた。

「んぐうううっ！」

たったそれだけで、ズンと強烈な快感が下半身で弾ける。しかも、同時に複数。

一度に自身の先端を幾つも刺激されるなどと、あり得ない感覚と快感に、鬼灯は戸惑いながらも圧倒的な感覚に心を折りかけていた。

これ以上張り型を操作されてしまったら、二十の敏感な先端が擦れて、あまりの刺激に息が止まってしまいかもしれない。

「どうです？お分かり？」



「はあ、はあっ・・・」

未だ鬼灯の身体にはわずかな振動の衝撃が快感として渦巻き、言葉を紡げないでいる。

「感想が聞けないから、もう一撃」

「うあ、やめ、やっ・・・！」

再び指で張り型を弾かれ、先ほどの快感が収束しきらない内に刺激を与えられ、弾ける快感に鬼灯は声をあげることできなかった。

じんじんと頭が真っ白になる衝撃が下半身でいくつも弾け、鬼灯自身から淫らな先走りがこぼれるのが止められない。まるで、複製の性感帯には刺激を与えて、本家のこちらは放ったらかしか、と涙をながしているかのようだ。

「・・・うう、はあ、はあ、はあ・・・」

ようやく息を吐き出し始めた鬼灯を見おろしながら、アデスは小気味よきそうにガラス筒を弾いて言う。

「そのバイブは抑止物ですよー。目が覚めて、説明なしにいきなり擦れまくると、気が狂う可能性があるかもしれない、ってブエルの提案で、わざわざ挿れて上げてるんですー。感謝してくださいー」

アデスの傲岸な言葉を耳に入れ、反発の言葉を吐きたいのに、体中が熱く疼き、自身がどうしようもなく疼き、洞内がビリビリと感じてしまっている。

口を開ければ官能の吐息しか出せず、鬼灯は必死で息を整えながら、身体の熱が収まるのを待とうとした。

「考えるヒマは与えませんよ、ほらほら〜！」

とうとうアデスは挿入された張り型を掴むと、ゆっくりと上下に抜き挿しし始めた。

「ううっ！あああ、あっ！あっ！ダメだああ・・・！あっ！ぐっ！うううう！」

拘束された鬼灯の身体が大きく浪打ち、あまりの凄すぎる快感のあまり、岸に打ち上げられた魚のように全身を震えさせる。

二十個の先端が同時に擦れ、筆舌に尽くしがたい激感が下半身に巻き起こる。一瞬意識が遠ざかるが、すぐに快感で覚醒させられ、また意識が遠ざかる。

普通に触られるだけで敏感でたまらない自身の先端が、洞内に二十もあり、それらすべてが張り型によつて一気に擦れるなどという常識をはずれた感覚は、二、三回の挿出だけでどんな強靱な精神力の者の心を折るのに十分な刺激だった。

「あつ・・・う・・・あ・・・あ・・・つ」

アデスが手を離すと、鬼灯の頭がガクリと下がり、気を失ったのだと見て取れた。

ただでさえ敏感な部位を増やされ、性感帯の密集する箇所に移植するなど、まさに悪魔の所業である。獲物に手心を加えない悪魔たちは、これから最上に淫らな身体になった鬼灯に様々な責めを繰り出してくるに違いない。

しかし当の鬼灯はそこまで考えが及ぶ間に、快感のあまり意識が混濁し、闇へと意識を没した。だが、悪魔たちがここで、鬼灯を休ませたままにするはずがない。

鬼灯自身に雷のような快感が走り、鬼灯は強制的に覚醒させられた。

「つ・・・！あ、くつうう・・・！」

見ると、アデスが黒い風切羽を持って鬼灯自身を弄んでいる。

この黒い羽は普通の羽と違い、触れられると、まるで性感神経を直接触られているかのような強烈極まる快楽を感じてしまう。

それが今、鬼灯が触れてほしくてたまらない自身へと、下から上に、シュルリと一撫で通った。

鬼灯自身の先端から先走りが一気にこぼれ出し、自身を伝って陰囊を通過し、鬼灯を責める張り型へと伝ってゆく。

「お尻に移植した先っちょも敏感ですが、やっぱりここが一番敏感ですよ。さっきの洗浄で、ここを徹底的に媚薬まみれにしましたからね・・・ほら、ほら・・・」

黒い羽でしゅ、しゅ、と自身を擦られ、下半身の奥にまで快感が響く。

「あつ！あつ！や、やめ、ああつ！ああああ！」

快感を堪えるのか、感じようとするのか、息むと挿入された張り型を締め付けてしまい、一気に二十の先端が押し付けられ、そこでも快感が弾けてしまう。

(こ。こんな・・・！こんなのありえませんか・・・！)

人外の快楽に晒され、鬼灯は戸惑いながらもその壮絶な快感を受け入れ始めている。人一倍敏感な身体なのに、適用力だけ桁外れに優れている、それは幸か不幸か、鬼灯に意識を失わせることを抑制し、頓死しそうなほどの快感を全て受け入れてしまうように作用してしまう。

「ほらほら、ごしごーし」

「あああつ！あぐつ！あああああ！うあ、やめろつ！あはああああ！」

黒い羽で自身をいのように撫でまくられ、鬼灯の紅い唇から悲鳴のような艶声が放たれる。羽の先端で自身の裏筋を上下に柔らかく擦られ、それだけで一気に先走りの淫液の量が増え続ける。

「お尻にたくさん移植しましたが、オリジナルのここが、やっぱり一番感じるようになってますからね、ご安心を！」

「うあつ・・・な、なにが、ご、あんし・・・あああああ！」

黒い羽で先端を素早く擦られ、鬼灯の腰が激しく痙攣する。鬼灯がやめろ、と言い放つより早く羽の動きが速められ、一気に絶頂まで上り詰めさせられてしまった。

「あああああつ！」

しかし先端に取り付けられた透明で実体のない装置のせいで、精液は別の場所へと瞬時に移転させられ、出るのは先走りの淫液だけである。

絶頂したのに、黒い羽は動きを止めず、それからさらに鬼灯を追い込みにかかると。

「あああ！や、やめ、はあ、ああああつ！あつ！あつ！あああああ！」

絶頂して敏感になった部分をさらに責められ、鬼灯の瞳から涙が零れ落ちる。素早く先端を擦りまくられ、再び絶頂が訪れるが、今度の快感は先ほどの比ではない。

「あつ！ああああつ！あああああー！」

鬼灯の切なげな声が屋内に響きわたり、先端から透明の淫液が精液の代わりに噴出した。

黒い羽をベトベトに濡らし、吹き出し続ける透明の液。

絶頂が収まったと同時に、鬼灯の頭は再びガクリと落ち、涙が地面にぱたぱたと散った。

「出た出た。やっぱり、ホオズキさんは潮吹きでなきゃ！」

嬉しそうに鬼灯の乱された姿を眺め、アデスは黒の羽を引いた。

そして広げられた両足の間に顔を近づけると、秘孔に啞えこまれた張り型に手をかけた。

「っ！」

振動による強烈な快感で鬼灯は一瞬で覚醒し、すぐに自分の置かれている状況を把握する。

快感で頭は霞がかっているのに、明晰な鬼灯の頭脳はまともに回転し、知らないほうが幸せな事態であろうが知覚してしまう。

「ふふ、上と下・・・同時に責めたらどうなるんでしょうかねえ・・・」

まさに悪魔のような言葉を漏らし、鬼灯に絶望でめまいを起こさせる。

「やめろ、やめなさい！こんな事をして、一体何の意味があるんですか！」

身体で渦巻く快楽の熱に耐え、舌がもつれそうになりながら必死にまともな声を絞り出す。しかしその声色にはいつもの威厳はなく、裏返った悲痛な叫びとなってしまった。

そんな鬼灯の様子を面白そうに眺め、アデスが鬼灯の眼前に顔を近づけて言う。

「意味？ありますよ？僕の顔に傷をつけて、タダでいられると思ってるんですか？」

「・・・復讐、というわけですか・・・」

「全く、すぐに国際問題、国際問題と言いやがりますけれど・・・こっちのほうがよくばど国際問題のネタになりますよ。EU地獄高官にこんなケガさせたんですからねえ？」

それを言われると鬼灯は辛い、それを行ったことに後悔はない。これまで鬼灯に快楽で屈辱を幾度となく浴びせてきた相手に、ようやくできた反撃だ。

その黒い眼帯が目に入る度、胸のすく思いがよぎる。

どうせ、ブエルの医術ですぐに治るだろう、というのが気に食わないが。



「ほら、再開再開！ちゃんの良い声で泣いちゃってくださいね」

アデスは新しいフワフワの黒い羽を取り出し、再び鬼灯自身をくすぐりにかかった。

「あああつ！やめ、ああつ！ああああ！」

（痛みのほうが、ましですっ！）

心の中で絶叫しながら、鬼灯は再び下半身に与えられる度はずれた快感に耐えなければならなくなった。さらにアデスは、片手で黒の羽を操りながら、今度は秘孔に埋め込まれた張り型にまで手を伸ばした。

「ブエル、胸のほうを頼みましたよー」

「ふん」

背後に気配を感じたが、鬼灯は振り返るところではない。

台に拘束された両腕ではその暴拳を防ぐことはできず、上から黒の羽が二枚、左右の胸に覆いかぶさっても何も反抗することができなかった。

「んうんっ！あああっ！あっ！あっ！」

これまで堪えてきた身体の快感が、黒の羽が胸の突起に触れた途端に弾けた。下半身ばかり責められて未だに弄られない上半身は、極限の快楽枯渇状態だったのだ。そこへ性神経を直接弄ぶ黒の羽で性感帯を撫でられ、鬼灯の身体が一気に欲情で花開く。

黒の羽の先端が、桜色の胸の突起をスリスリと擦り、涎が出そうな快感の凄さに鬼灯の喉がのけ反る。上半身の性感が目覚め、さらに強い快感を求めて肌が一斉に疼き出す。

（ダメだ、いけない、こんなの、考えられない・・・！）

媚薬づけにされ、普段の何倍もの感度にされている鬼灯の身体は、もう自分ではコントロールすることができなくなっていた。

黒の羽が性感帯を掠めるたびに身体が大きく跳ね上がり、快感が脳天を突き抜け、鬼灯の思考を快楽一色に埋めてゆく。

「あああああっ！やめ、やめ、あああああっ！」

黒の羽で自身の先端をぐりぐりと抉られ、峻烈すぎる快感に鬼灯が悲鳴を上げる。しかし、鬼灯が構えるべきはここからだつた。

アデスは手にした張り型に力を込め、上下に動かし始めたのだ。最初の時とおなじように、ゆっくりと。

「つつっ！」

鬼灯の身体全体が一瞬快感で固まり、あまりの愉悦に神経が全てを受け入れきれない。しかし、鬼灯の身体はすぐに目覚め、何をされたのか、何が行われているのかをすぐに把握し、受け入れてしまう。

じゅ・・・じゅ・・・と淫らな音を立てて張り型が挿出される。

「あああああ！ああ、ああああ！ううっ！んぐう、はあああっ！」

張り型が擦れるたびに、二十の先端が擦られ、あまりの快感に頭が真っ白になってしまう。

一つの先端だけで悶絶する箇所が二十、しかも、同時に摩擦されるなど、普段では考えられない状態だ。しかし、悪魔の技術はそれを可能にしまった。運悪くその実験体にされた鬼灯は、反抗どころか我慢することも許されず、ただ彼らのされるがままだった。

※中略※

「これからパーティーに出席していただきますからね！会場まで、廊下を歩いてもらいますよー」

歩くどころか、身体を動かそうと力を込めただけで腰が砕ける鬼灯に、長い廊下を歩くななど無茶な話だった。

拒否する鬼灯を立ち上がらせ、倒れないように、その間へ縄を挟み込ませたに過ぎない。

縄、というよりは丸太と言った方が正しいほどの太さと逞しさを持った触手縄の上を、鬼灯は最も敏感な部分を擦りつけながら歩くしかなかった。

股間に何かを食い込ませて歩くというだけでも淫靡で快感が強烈なのに、触手縄は全体にデコボコや繊毛を備えていて、上を通過するたびに鬼灯の身体を快樂で苦しめてゆく。

(ううつ・・・響く・・・歩けない・・・！)

一歩踏み出すだけで、洞内に振動が走り、膝が折れそうになるが、跨った触手綱がそれを阻止する。足の力を抜けば綱は敏感な部分により食い込み、声をあげずにはいられない快感が巻き起こる。

綱は鬼灯自身、陰囊、会陰、秘孔の四点を常に責め擦り、鬼灯に甘い声を上げさせている。陰囊や会陰の刺激で絶頂できる鬼灯にとっては、最も強烈な責め方で、その視覚的インパクトも相まって極めて強烈な責めだと言える。

会陰も陰囊も、強く押し付けられながら擦り続けられると、肛悦のような絶頂を迎えてしまう。現在行われている責めはまさに強く押し付けてからの強い擦り込みで、絶頂へ登る快感がすでに始まり、洞内の快感だけでなく、外側からの快感でも鬼灯を責めさいなむ。

「ふあっ・・・！あああ、あっ・・・！はあ、はあ・・・！」

自らを苦しめるとわかっているのに、鬼灯は必死に足を前に踏み出し、前進しようと努めている。その理由は、背後に迫る異形にあった。

(ううっ、また迫ってきている・・・！)

背後に鬼灯よりも丈高く、真っ黒でデコボコが一切ない、つるりとしたナマズのような生き物が迫っている。後ろを振り向かなくても、地面に映る影で相手がどれだけ自分に近づいているのかがわかる。

この影に身体全体が飲み込まれるほど近づかれてしまえば、最悪の仕打ちが鬼灯に待っている。

「はあ、はあ、はああ・・・つあああ・・・！」

これまでに数度それを味わっている鬼灯はその恐ろしさを身に染みて理解し、そうならないように必死で足を前に動かす。

しかし、その度に洞内でクチクチと性感帯が擦れ、ぞくぞくと背筋に快感が走り、進む足が止まる。

すると、食い込んだ触手綱がら人間の舌が幾つも生え、一斉に自身や陰囊、会陰を激しく舐めにかかってきた。

「うあああつ！あああつ！あはあああああ！」

突如訪れた予想外の快感に、鬼灯は歩みを止めてしまう。

三枚の肉厚の舌が自身の裏筋をバラバラに舐め上げ、表面がザラザラした一枚が先端をグリグリと押し付けながら擦り、縄の食い込みでひしゃげた陰囊は柔らかい部分をヌルヌルの二枚の舌でペロペロと舐め回され、硬い舌が、舌先で会陰を上下左右に擦りたてる。

「あつああつあああああああつ！」

一度に与えらえる快感が鬼灯の許容を越え、とうとう射精絶頂を迎えてしまう。それでも舌の動きは止まらず、相変わらずに獲物を激しく舐め回し、責め続けて来る。

「あうっ、あうううっ！うんん、んっ！んああああ！」

再び絶頂の波に乗り始めた鬼灯の身体の上に、黒い影が覆いかぶさる。

鬼灯がそれに気づいたのは、快感の波に翻弄されている最中で、もはやそれを回避することもできなかつた。

「ひぐっ！」

ナマズ物体が鬼灯の背後にぴったりと突いた瞬間、一瞬快感を忘れて鬼灯の背筋に冷たい物が走り、すにそれは恐怖に似た感情に切り替わる。

「いやだ、あああ、ああっあああああああ！」



ナマズ物体の上方にはキラキラとした三粒の光がある。おそらくはこの物体の目なのだろう。その目がぐるりと鬼灯を見おろし、ナマズ物体はさらに鬼灯に身体を密着させた。

触手綱はナマズ物体に吸い込まれるようにしてその先は消失している。そして、綱の最後には凶悪なデコボコを備えた張り型、おそらくこの物体の性器が隆々と鬼灯を待ち構えていた。

「うあぐうううう！」

綱から生えた舌でぬるぬるになっていた秘孔は、物体の屹立した先端を飲み込み、そのまま後ろからの強引な突き上げで半ばまで凶悪性器を飲み込んでしまった。

「あああああああああ！」

とうとう得体のしれない怪異に犯され、その衝撃に鬼灯の身体全身がびくびくと痙攣する。

燃えたぎる様に熱く、絶対的な質感を持った異物が敏感な秘孔に挿入され、それだけで絶頂へ近接してしまう。

一度入り込んだ異形はどんどん中へと入り込み、とうとう根元までを鬼灯の中へ入り込んだ。

その長さは丁度鬼灯が性器の先端を移植された最後列まで届き、鬼灯の性感を余すところなく暴き出し  
ている。

しかし、怪異の性器は、その凶悪なおうとつで洞内を擦るだけにとどまらない。

「はひっ・・・！あっ！あああああー！ー！」

鬼灯の中に挿入された異物は、狭い洞内で縦横無尽にうねり始め、どこもかしこも最上の性感帯になっ  
ている鬼灯の粘膜をこれでもかと摩擦し、快感の塊を送り込む。

鬼灯にとって辛いのはここからだ。異形の中には目でもついているのか、鬼灯の移植された洞内の  
先端のいくつかに長くくねる性器をより密着させ、一斉に細かく振動するのである。

「かはっ・・・！いっ・・・！ああああああ！」

何の細工をされていなくてもキツイ振動責めに、鬼灯は裏返った嬌声を上げる。その間も鬼灯自身を舐  
める舌の動きは止まらず、外でも内でも快感が弾けてしまう。

極度に敏感でイキやすくなっている鬼灯自身は、次々と与えられる責めに堪えられず、あえなく射精絶  
頂を迎えてしまう。次々と繰り出される快樂の津波に、快樂を堪えるという、鬼灯の意思はひとたまり  
もなく打ち流された。

「あああああああ————！」

その快感の深さは、後ろの快感と相まって脳が煮えそうになるほどに甘美だった。外が絶頂を迎えたことで内壁が収縮し、異形の振動と摩擦をさらに強く締め付け、より感じるようになり、鬼灯は自分で自分を苦しめる顛末を迎えてしまう。

「んああああああつ！あああああ————————！」

狙い澄まされた洞内に移植された性感帯が絶頂を迎えるが、振動は他の性感帯にも飛び火している。一度絶頂すると、連続して絶頂するように、洞内は細工されているようだった。

「うぐつ！うあああああつ！あああああ——————！」

呼吸もできないほどの凄まじい快感の連続に、鬼灯は涙を飛び散らせて絶叫した。回数にすると、三分足らずで二十回近く連続絶頂させられるなど、あり得ない事態であり、普通の人間であれば発狂してもおかしくない絶対的快樂である。

それを、鬼灯はこれまで数度味わわされ、散々に弄ばれた。黒い異形に犯される事への畏怖の念が植え付けられ、それが唯一、鬼灯の歩む足を動かす原動力だった。

しかし絶頂の連続で、流石に意識が薄れてきた鬼灯が、上体を前のめりに倒し触手綱へと頭を預ける。しかし、異形の責めは終わらない。新たに洞内の性感帯に狙いを定め、再び、今度は激しく振動し始める。

「んあああああああああ！」

気を失いかけていた鬼灯の意識は、一気に快樂まみれに放り込まれて覚醒し、激感を感じずにはいられない状況へと戻される。

この快樂地獄から逃れるには、前進して自ら異形を引き抜くしか手段はないのだが、すでに激悦の虜になってしまっている鬼灯の身体は一ミリも動くことができない。

ただただ絶頂させられ、喘がされ、弄ばれる。

凶悪な仕掛けに嵌められ、しかし逃げる手段もなく、鬼灯はただ美しい供物として怪物の欲望を一身に受けさせられていた。

「あーらら、また捕まっちゃったんですかあ？ほんとに犯してほしいんじゃないでしょうねえ？」

前方から靴音を響かせながら、鬼灯の気分とはかけ離れたおどけた声が響き渡る。黒い怪物に犯され続ける鬼灯を上から睥睨し、アデスはため息をつく。

「歩くのを止めるとこうなるって・・・さつきから何回もおんなじ目に合ってるのに、全く懲りない人ですねえ。えいっ」

アデスが黒い怪物を両手で後方へ押すと、まるでスケートリンクの上かのように滑らかに身体全体が移動した。

「はぐううううっ！」

一気に異物が引き抜かれる快感を置き土産に、怪物は一メートルほど距離を置いて新たに触手綱を映えさせていた。

「あうっ・・・あぐっ・・・あぐっ・・・」

激感の余韻に浸って焦点の定まらない瞳で綱の上に突っ伏し、震える鬼灯を見て、アデスはかすかに帆頬笑み、その白い頬を軽く打って正気を取り戻させた。

「はぁ・・・っあ、ああぁ・・・」

洞内を責める物体はなくなっただけとはいえ、綱が食い込んでいる股間部分は相変わらず無数の舌で責め続けられている。

ぞくぞくと湧き上がる快感をこらえ、鬼灯はなんとか上体を上げて俯きながらも、アデスに恨み言をつぶやく。

「こ、こんな、バカげた仕掛けっ・・・！考えたヤツを殺してやるっ・・・！」

相変わらず気の強い鬼灯の反応に対して、アデスはさらに笑みを深めた。

「その意気ですよ、ホオズキさん・・・。僕の片目を傷つけた罰だと思って、ちやっちやと綱の上を渡ってくださいね♪」

心の中で「殺す」と思いながら、鬼灯は視線を前方に向けていた。

薄暗い廊下はどこまでも長く続き、その先は暗闇で見えない。鬼灯を支えている触手綱も、同じ長さほど続き、廊下の暗闇にまぎれて先が見えない。

(一体、どこまで歩けば終わるんだっ・・・！)

※中略※

ジャラ、と鎖が鳴り、急に前に引かれて鬼灯が体勢を崩しそうになる。それと連動して、体内の性感帯が蠢き、甘い衝撃が背筋を駆け抜ける。

脚に力を込めただけで感じてしまうので、確かに今の鬼灯ではこの鎖を引きちぎることはできない。

アデスは鬼灯につながった鎖を片手に、巨大な扉の前で声を張り上げた。

「はいはい、連れてきましたよ！扉あけちゃってくださいーい！」

アデスが巨大な扉の向こうの誰かに声を張り上げると、両開きの扉が厳かに開いた。

鎖にひっぱられるがまま鬼灯は薄暗い部屋に通される。目隠しされた視界ではほぼ真っ暗に感じる世界が、五歩、六歩と歩みを進めたとき、薄ぼんやりとした明かりが目に入り、周囲の様子がわかってきた。

パーティー会場のような整列されたテーブルに、その椅子へ腰かけたり、立ち上がっている人影。ほとんどがスーツ姿で、身なりはかなり良くつくろっている。

恐らく視線がこちらに向いているのだろう。鬼灯の耳に聞きたくない耳障りな会話が入り込んできた。



「今日はジャパンの悪魔、「オニ」が主賓と聞きましたが・・・」

「そうですよー、皆さん興味津々の神秘の国、ニッポンです！かなり位の高いお方ですから、みなさんほどほどのご容赦をおねがいたしますねー」

「またまた・・・そう言って、一番煽ってくるのはアデス様ではないですか・・・」

「おお！キモノ！やはり美しいですね・・・」

「肌が白いな・・・。白人とはまた違う、透けるような白さだ」

「素足たまりませんな・・・」

欧米では家の中でも靴を脱がないので、生足に興奮する輩は結構いる。長い着物から覗く深いスリットの奥の美脚にざわめき、注視されている不快感に鬼灯は苛立ちを募らせる。

「おーっと、おさわりはいけませんよ？いつも通りにしてください！」

手を伸ばしてきた来賓の悪魔に注意をし、アデスがさらに鬼灯の鎖を引っ張る。首が揺れただけでも中の性感帯が擦れて脚に力が入らなくなるので、鬼灯は引っ張られるがままホール中央へと導かれてしまう。

「さあさあみなさん！今日のイケニエちゃんはジャパン悪魔の「オニ」さんですよ！こう見えて僕たちよりも頑丈な身体にできていますから、多少おいたをしても大丈夫ですからねー！」

おおお、と周囲で歓声が湧き上がり、鬼灯の周りを取り囲む人影が一斉に増える。

「くっ・・・なんですか、この茶番はっ・・・！」

鬼灯は歯を食いしばり、ぼやけた視界に見えるアデスを目隠しの向こうから睨む。

「じゃあ、とつととやっちゃいましょ！みなさんも待ちかねていらっしやいますことですしー？はい、お披露目〜」

そう言って鬼灯の着物の裾をガバとめくり、腰帯に押し込んで下半身を完全に露出させた。

「っ！」

大勢の前で、いきなり秘めた部分を晒される羞恥に鬼灯は腰を引かせたが、その程度では当然隠しきれない。

さらに大きな歓声が上がリ、同時に熱のこもった笑い声がそこかしこで湧き上がる。

「これはこれは、なんと美しいペニスなんでしょう！」

「まるで子供のような穢れなさ・・・さぞや敏感なんでしょうね」

「たまりませんな・・・これにむしやぶりつきたいです・・・」

「美しい脚・・・これに私のを・・・擦りつきたい・・・」

「見事な尻ですね！これは締りがよさそうだ！」

男たちの淫らな視線が鬼灯の肌に突き刺さる。口々に鬼灯の身体を称賛し、いかかわしい言葉を吐いて自らの欲望を吐露する。その熱気に、鬼灯はおぞましさを感じ、腰をさらに引いたところで、臀部に衝撃が走った。

パシン！

「んぐっ！」

臀部を何かの器具で打たれた衝撃で、中の性感帯にまで衝動が走る。

「このオニさんは今、めちゃくちゃ感じやすくなっちゃってますからねー、みなさん、どうぞご自由にしてくださいまし。ほら、ほら！」

パシンパシンと連続で尻を打たれ、衝撃から逃れようと引いていた腰を付きだし、洞内の快感で反応してしまっている自身を観衆の前に突き出してしまふ恰好になってしまう。

「おお、これはこれは・・・」

「早速調教してほしいということですか？」

快感で意識が明滅する中、取り囲む人影が手に手に器具を持ってこちらに近づいてくるのが視界に入る。

「く、来るな、何をする気ですか・・・むぐっ・・・！」

口に何かがあてがわれ、球状の物体を口に嚙まされる。

「ちよーっと小うるさいんで、お口に栓しちゃいますね！出来上がったら取ってあげますから、とつと意識とばしやがってくださいいねー」

「むぐっ・・・！！んぐううう！！」

幾つか穴の開いたゴルフボール大の猿ぐつわが鬼灯の小さな口腔に入り込み、息をするのに不自由はないが明確な声を出すことはできなくなってしまう。

「それでは、まずはこれで・・・」

虫の羽音のような機械音が周囲でいくつか巻き起こり、その一つが鬼灯に迫った。

「んぐぐっ！？ぐっ！ううう！」

反応している鬼灯自身に甘い衝撃が走る。首を下へ向けると、電動マッサージ機の先端を自身に這わせている。

電マの衝撃は甘く強烈で、媚薬漬けにされた鬼灯の身体はすぐに絶頂の糸を掴み、駆け上ってしまう。

「おお、確かに感度は良いようですね・・・どれ、私も・・・」

電マの振動音がもう一つ迫り、次の瞬間には甘美な衝撃が自身にもう一つ追加される。快感がさらに強烈になり、鬼灯の絶頂は一気に差し迫った。

（果て、果てるっ・・・！嫌だ、こんな大勢の目の前で・・・！）

しかしさらに電マが追加されたらしく、三本の振動する器具で敏感な自身を責められ、否が応でも快感が高まってしまい、我慢どころではなくなってしまう。

「おっ、イキそうですね」

「射精しますか？」

「オニはどんな色の精液なんでしょうかね？楽しみです・・・」

自身の表面をはい回る電マの一つが、先端に触れた途端、鬼灯の精神は決壊した。

「んんっ！んんっ！んんっ！んんっ！んんっ！」

下半身の愉悦が弾け、快感の栓が一気に解き放たれる。自身の先端から透明の粘液が吹きこぼれ、周囲の悪魔たちから小さな歓声があがった。

「透明ですか、日本のオニは・・・」

「いや、これは潮ですね。まさか射精ではなく、潮をいきなり吹くとは・・・」

絶頂の余韻が収まっていないのに、まだ電マは鬼灯を責めるのを止めない。絶頂した直後の敏感な自身を責められると、快感が上乘せられて、さらに連続して絶頂してしまう。

「んんんーっ！んんん！」

再び透明の淫液が吹き上がり、責める電マを濡らしてゆく。

「あははー、この子は今罰の最中で、精液は別空間へ行くように細工してるんですよ。だから、精液の代わりに潮が出るんです！いやー、この子の精液をお見せできず残念ですねえー」

後ろからアデスがまくし立てる声が聞こえるが、今の鬼灯にはそれに苛立つ余裕すらなかった。二度連続して絶頂したというのに、電マはまだ自身から離れてくれない。

微細な振動が極敏感な性感神経を震わせ、自然と生唾がせりあがってくるほどの快感が下半身を襲う。

「それは残念ですね・・・しかし、いきなり潮を吹くとは、なかなか感じやすい・・・」

「いやあ、オスの潮吹きなんて久々に見ましたねえ。この子はなかなかスジがよさそうだ」



「んぐっ！んんっ！んんーっ！んんーっ！」

ずっと自身に電マがあてがわれ、絶えず快感を押し付けられた状態に、鬼灯がうめき声をあげる。電マは左右から挟むように二つが押し当てられ、先端を一本が上からあてがってきた。振動がすべて自身へと向かい、あまりの愉悦感覚に、もう足が立たなくなってきた。

(も、もう無理だっ・・・)

膝が落ちそうになった瞬間、誰かの腕が後ろで組み縛られた鬼灯の腕を掴み、無理矢理立たせにかかる。

「おっと・・・膝についてはいけませんよ・・・」

耳元で囁かれて、そのおぞましさにビク、とうなじが反応する。

ジャラ、と鎖の音がして腕に何か器具をはめられ、それに鎖が取り付けられて上から吊るされる。

「くっ・・・う・・・」

全体重が両腕にかかり、軋む間接に痛みを感じたが、鬼灯にとってはその痛みが良かった。痛み集中すれば、快楽から少しでも逃れられる。

すると誰かが一メートル四方の布を持ってきて鬼灯の脚に踏ませた。布に描かれた複雑な文様が光を放ち、直後腕の痛みは一切なくなってしまった。

(また、こんな魔術で・・・)

「痛みがあると純粹に快感を感じられませんからねえ・・・こうやって楽にしてやらないと・・・」

「さあ、再開ですよ・・・」

一連の作業の間だけ外されていた電マが再びあてがわれ、鬼灯は快楽の波にもまれ始める。

「くっ・・・うううー！ー！」

ヴヴヴヴ・・・と低いモーターの音がホールに響き、反応する鬼灯を熱いまなざしで見つめる悪魔たちの熱気が立ち上がる。

左右から電マで挟まれ、先端も責められ、全振動が自身に向かい、振動の逃げ場がほとんどない。最初に二回連続で潮吹きをし、あれが絶頂の証だと悪魔たちには思われているが、鬼灯が潮を吹くのは極めて快感が上ったときだけで、刺激されている最中も先走りを零しながら絶頂しているのだ。媚薬でてきめんに敏感になって、快感を拾いやすくなった身体は、背筋を緊張させて、もう五回絶頂を迎えている。

普通の人間なら一度で失神するほどの強烈な絶頂を、鬼灯はこれまで耐え続けていたのだ。しかし、鬼灯が快楽に耐性をつければつけるほど、悪魔たち好みの身体に仕上がってしまうことなど、当の本人は分かってなどいない。

「おやおや、ここがお留守ですね・・・」

紳士的な口調で一人の悪魔がもう一本電マを取り出し、まるでそこへの刺激を待っているかのように振り返っている裏筋へと先端を当て始めた。

「んぐぐぐぐぐうーうーうー！」

三本でも十分キツかった快楽が、最も感じる裏筋に打ちこまれ、鬼灯の感度が一気に跳ね上がる。

さらに悪魔は技巧を凝らし、根元から先端までを上下に往復させ、鬼灯に絶頂を強制した。

「んんんーっ！んっ！んっ！んっ！」

目の前が白むほどのたまらない快楽に、鬼灯は三度目の潮吹き絶頂を迎える。

「おおー、いったぞ。ははっ、なかなかがんばるじゃないか」

「しかしイキつつぷりは見事ですね……。背筋があんなに反り返って、本当に気持ちよさそうだ」

「確かに、演技ではなさそうですね」

「興奮してきた！」

口々に悪魔たちが感想を述べるのを、普通の状態なら忌々しく感じていただろうが、今の鬼灯は快感が強烈過ぎてなにも考えることができない。

絶頂したというのに電マは離れず、強く押し当てられたり、上下になぞられたりされ、強弱をつけた振動が鬼灯自身を責めさいなむ。

「んーっ！んんんっ！」

再び絶頂が襲い、鬼灯は背を弓なりに反らせるが、電マは離れてくれない。

絶頂するたびに秘孔が強く締めまり、中の性感帯が刺激され、前どころか触れられていない後ろでも愉悦を拾ってしまう。

鬼灯の身体は、前の快感と共に後ろへの快感も欲し始め、彼の意味とは正反対に暴走し始めていた。

「んんんんーっ！っ！」

三度目の潮吹きが極まると、ようやく電マは自身から離れていった。

その間、鬼灯は十に足りるほど絶頂していたが、悪魔たちには知る由もない。

ようやく電マから解放され、鬼灯の身体から緊張から解き放たれて、ドッと疲労感が襲ってくる。力を失った身体は全体重を拘束されている腕に預けるが、足元の魔法陣のせいで痛みは一切ない。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ……」

噛まされたギャグボールの奥から、鬼灯の熱い吐息が吐き出され、体中の汗から淫靡な芳香が立ち込め始めた。

「淫らな良い香がしますね・・・」

「本当だ、オリエンタルな芳香ですな」

「感じるといい匂いを出す悪魔なんて、淫魔でもなかなかないぜ？」

鬼灯の様子にさして興味を持っていなかった悪魔たちも集まり始め、鬼灯をぐるりと囲む。

「ふふ、みなさん、この子のお尻にはさらに感じる仕掛けがほどこしてありましてえー、ぜひ遊んで行ってほしいんですよえ〜」

アデスが鬼灯の滑らかな臀部を軽く撫でながら含み笑いを零す。

撫でられるだけでなぜか中が熱くなり、鬼灯は未だ責められていない洞内への快感に意識を向けざるを得なくなってしまう。

「ほう・・・どんな仕掛けですか？」

これまでも主賓には様々な仕掛けをほどこしてきたのだろう。次はどんな細工をしているのか、悪魔たちが興味ありげに耳を傾ける。

「コックの先つちよを培養して、腸壁に移植しちゃいました！それも二十！全部ちゃんと絶頂しますよー？」

アデスの説明に、悪魔たちの間で小さな歓声が湧き上がる。

「それはそれは、またブエル様のお手ほどきで？」

「そうです、協力してもらいました！」

「またそれは・・・随分鬼畜な事をなさいましたね・・・フフ・・・」

「ああ、アスモデウス様！堪りません！俺はこいつにブチ込みたい！」

早くも鬼灯の色香に当てられた悪魔の一人が声をあげるが、アデスは無視して説明を続けた。

「この子はなかなか反抗的でダメダメな子なので、たくさん罰が必要なんです。みなさん、罰を与えるのは好きでしょ？こちらにたくさんご用意いたしましたから、好きなもので罰をお与えになってくださいましー」

鬼灯の背後でガチャガチャと多数の器具が擦れる音がして、その様子に悪魔たちが口々に感想を述べている。

「ほう、これは・・・」

「僕はやはり定番の物が良いですね」

「これは初めて見ましたよ・・・いやあ、これに耐えられるということですか？」

「私が持参した玩具は使つてはいけませんか？」

視線が前に固定されている鬼灯には、背後で行われている出来事を伺うことができない。



「それじゃあ、皆様どうぞ」

背後でガヤガヤと悪魔たちが騒ぎ、時折ぞつとするような機械音が耳に入ってくる。

これからどんな仕打ちをされるのかと鬼灯は身構えた。恐怖はない。どちらかと言えば怒りがある。しかし、前への責めで後ろがすでに暖まっている状態になっていて、鬼灯自身もそれには気付いていた。

（ほんとうに、こいつらは何をしたんですか・・・）

鬼灯はため息をついて悪魔たちの行動にあきれ果てる。自分が極上の獲物だと自覚のない彼からすれば、男の身体で楽しもうとする彼らの変態に見えて仕方がない。

そんな変態達に良いようにされて、思うように絶頂させられ、自分も変態だろうか、などと自嘲気味に思っているうちに、最初の悪魔が背後に近づいてくるのを感じた。

強引に尻肉を左右に分けられ、秘めた部位が空間に晒され、鬼灯は羞恥を感じた。その部分を見た悪魔たちから、再び下卑た歓声があがる。

「これはまた、なんと美しい・・・」

「色、皺、ともに完璧です！なんと小さく、縮りのよさそうな穴でしょう！」

「たまらん・・・舐めしゃぶって何度もイカせてあげたいなあ・・・！」

耳にしたくない悪魔たちの称賛の声に苛立ちながら、鬼灯はこれからされることに対して身体を身構えさせていた。どうぜ、見られるだけでは終わらないのだと、責め慣れている鬼灯は知っている。

「では、手始めに最初はこれで・・・」

「んっ・・・」

鬼灯の秘孔に、柔らかい樹脂でできた性具があてがわれ、それだけで洞内が浪打ち、愉悦が背筋を走る。

「んんぐうううっううう！」

そのまま力を込められて一気に性具を挿入される。

続きは製品版でお楽しみください

